

西南アジア=北アフリカの山地生活様式 (I)

——ドゥンプラノール氏の所説を中心に——

末 尾 至 行

は し が き

西南アジアから北アフリカにかけての地域は、いうまでもなく巨視的には、砂漠・ステップからなる旧世界の乾燥地域の一面を形成している。ただ正しくは、全域に対してはごく小面積ながら、冬雨・夏雨あるいは周年雨にめぐまれる湿潤気候地域も、この広範囲の中には含まれているというべきであろう。

その際、この気候の偏差を生み出す一因となっているのは山地の存在である。すなわち、この広汎な地域内には、アトラス、ポントゥス、ザグロス、ヒンズークシュなどの高峻な褶曲山脈をはじめとする、構造的な成因や火山活動にもとづく諸山地が各処に横たわり、地形的な変化に加えて、気温・降水などからする気候的な偏差を、この地域内部にもたらしているのである。

したがって、西南アジア=北アフリカに存在する山地そのものは、多少とも、海岸平野や乾燥平原、あるいは乾燥高原とは異った、自然的条件をおびている。それ故に、それらの山地内で営まれる生活様式も、たとえば乾燥平原・高原上のオアシス農村や遊牧民のそれとは異った、あるいは階段耕作、あるいは移牧・山地遊牧といった、特異な様式をとるに至っているのである。したがって、このような山地生活様式を理解するためには、山地周辺の状況との繋りをも加味しながら、その成立過程・変貌・相互関連などについて、独自の尺度をあてねばならないであろう。

西南アジアにおける家畜飼養に興味を覚える立場上、上のような山地生活様式に対して関心をはらっていたところへ、筆者は一つの極めて示唆に富んだ論文にめぐりあった。フランスの「地理学年報」Annales de Géographie 384号(1962年3-4月)に掲載された、Xavier de Planhol氏の *Caractères généraux de la vie montagnarde dans le Proche-Orient et dans l'Afrique du Nord* と題する論文がそれである。

西南アジア = 北アフリカの山地生活様式 (I)

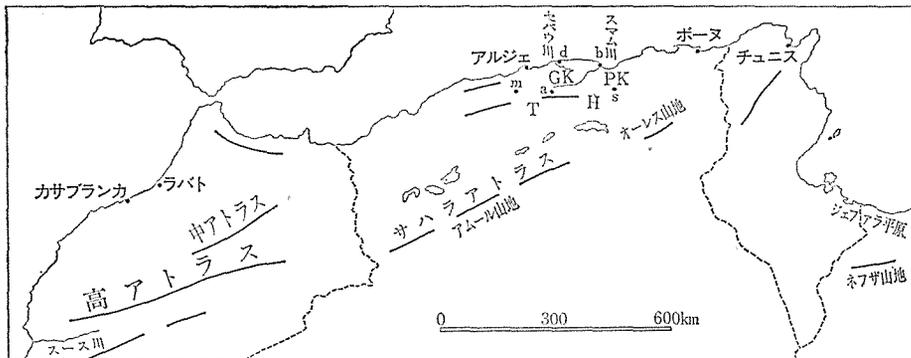
ドゥ＝プラノール氏は、現在ナンセイ大学の地理学教授であるが、広く近東・北アフリカの伝統的な生活様式について積年の実態調査をつづけ、逐次数々の好論文を発表してきている。たまたま筆者はさきに本誌4号上で、イラン西北山村に関するそのうちの一篇を、要約紹介したことがあった。

ところでここに紹介しようとする上の論文は、氏が近東・北アフリカの山地生活様式についての実態調査を継続する上での一つの道標であり、あるいは見方によっては一つの結論でもある。すなわち、この論文の意図は、如上の地域の山地生活の一般的性格を明らかにしようとするのであるが、その論述は、自己の調査の結果に加えて古今の多数の文献によって組立てられ、該博かつ緻密な構成を保ち、かつ的確な見透しをもっているからである。

したがって筆者は、自らの学習の為でもあるが、この論文を紹介するにあたって、出来る限り原文に忠実であろうとした。さらには、読者の便を考え、氏が傍証として引用する文献のうちいわゆる古典にぞくするものについては、英訳あるいは邦訳にあたって、その傍証部分を本文中に挿入して補うこととした。また、氏のあげるすべての引用文献を検索しえたわけではないが、それらは一応巻末に列挙することとする。なおついでながら、氏の標題にある近東の概念は、狭義のそれではなく、東はアフガニスタン・パルチスタンにも及ぶ広義のものであることは、以下でおのずから明らかとなる。

* * * * *

ドゥ＝プラノール氏は、西南アジア = 北アフリカにおける、山地占居・土地利用様式の地域的偏差を端的に表現する指標として、人口密度と居住高距限界とを検討すること



第1図 北アフリカ関係地名

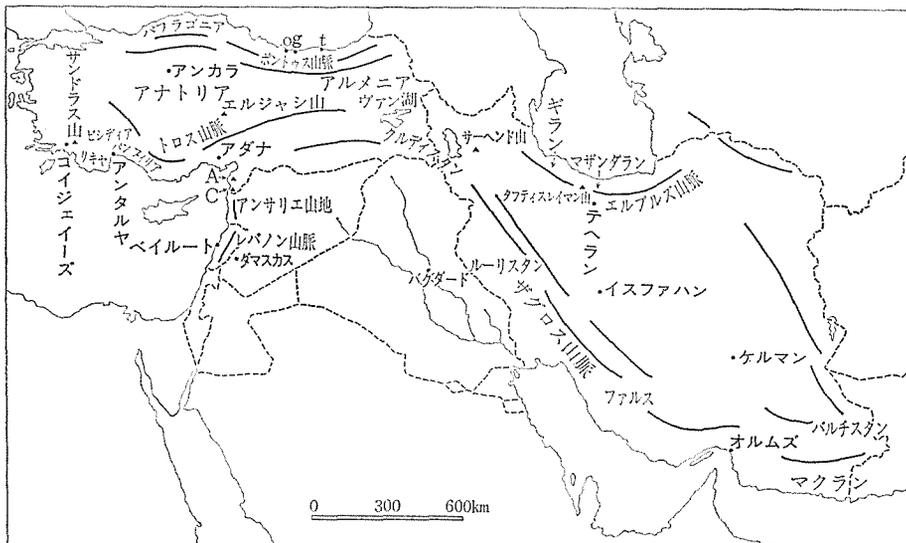
(GK…大カビリー山地, PK…小カビリー山地, T…ティテリ山地, H…ホドゥナ山地, b…ブージー, d…デリス, s…セティフ, a…オーマル, m…メデア)

から論を説きおこしている。すなわち、まず人口密度 (/km²) に関しては、次のような 3 類型が類別されよう。

- ① 山地としては異常な程の人口密度……大カビリー Grand Kabylie 山地のティジ = ウゾン Tizi-Ouzon 郡の 173 人 (1954年)¹⁾, ベイルートを除くレバノン山脈の 161 人²⁾, およびアラウイト Alaouite (アンサリエ Ansarieh) 山地の 88 人³⁾。
- ② 自給自足的生活を反映する人口密度……大アトラス Grand Atlas (高アトラス Haut Atlas) 山脈中央山塊の 22 人 (1936年)⁴⁾, ジェベル = ネフザ Djebel Nefusa 山地東部の 25 人 (1915 年)⁵⁾。 および第 1 次大戦前におけるアルメニア・トルコ領クルディスタンの大部分も、実数は不明であるがこの類型に入るであろう⁶⁾。
- ③ 空疎な人口密度……トロス Toros 山脈やパフラゴニア Paphlagonia 地方の諸山嶺など、アナトリア地方の諸山脈の人口密度がこの類型に属するが、ただこれらの自然地域単位の実数計測は今日まで行われていない。

ついで、自然条件とりわけ気候条件をより直接的に反映する資として、居住高距限界の差が考察の対象となろう。若干の例を次に列挙すれば、

- ① アナトリアの地中海斜面においては、全般に、冬季集落すなわち根拠集落の高距限界は極めて低い。たとえばリキア Lycia では、チャル = ダク Çal Dag, イェシール



第 2 図 西南アジア関係地名

(A…アマヌス山地, C…カシウス山地, o…オルドゥ, g…ギレスン, t…トラブゾン)

西南アジア＝北アフリカの山地生活様式（I）

＝ゲル＝ダク Yeşil Göl Dağ の山麓でこそ、例外的に高距限界は 1,100 m に達するが⁷⁾、サンドラス＝ダク Sandras Dağ の南西斜面では 500 m にすぎず、コイジェイズ Koyceğiz の海岸平野の東縁では約 150 m にまで下っている⁸⁾。

- ② これと対面し、同じく地中海にのぞむシリア＝レバノン海岸部では、高距限界はしばしば 1,300～1,400 m に達し、レバノンの最大級の集村は、往々にして 1,100～1,300 m の高度帯に認められる⁹⁾。
- ③ アナトリアの黒海斜面においては、オルドゥ Ordu とギレスン Giresun の間に存在する峻阻なカラゲル Karagöl 山塊北斜面にみられるように、高距限界は、時には 750～1,000 m に達するが、驚く程低く位置づけられている。
- ④ 他方カスピ海沿岸においては、たとえばエルブルズ山脈中のタフティ＝スレイマン Takht-i-Suleiman 山北斜面についてみれば、この付近は多湿な条件下にあるが、高距限界は 1,350 m を示している。
- ⑤ アナトリアの内陸斜面においては、まずその東南部のコマジェーン Commagène 地方のトロス Toros 山脈の高距限界は 1,400～1,500 m を示している。カイゼリの南に位置するエルジャサン＝タキ Erciyas Dagi 山地斜面のそれが 1,800 m に達するのは、むしろ例外に属する¹⁰⁾。
- ⑥ 同じくアナトリア内陸斜面のうち、アルメニア＝クルド地帯については、たとえばヴァン Van 湖の南において、内陸的条件が苛酷でないことから、高距限界は 2,500 m ないしはそれを越えている¹¹⁾。

以上、類似の自然環境をそなえた山地における集落の高距限界の差異を、アナトリアと非アナトリアについて交互に対比的に述べたわけであるが、その結果からも明らかのように、高距限界の差は必ずしも、自然条件のみからは説明できない。すなわちそこには、それぞれの山地を占居している住民の、質的な相違が理由としてひそんでいるのである。

1 山地生活に関与する住民要素

すなわち、これらの山地に居住し、それを開発＝利用している住民要素の相違が、山地相互間の人口密度の差、高距限界の差の理由として、分析されねばならない。となれば、その際、地中海地域および中東地域は、住民要素が複雑に往来した十字路の性格を強く帯びてきた事実を考慮すべきである。具体的には、インド＝ヨーロッパ語族系諸民族の

地域割りが終熄し、約25世紀にもわたる長期の安定状態をへた後に、中世において、この地域は、2系統の遊牧民の到来によって根底からゆさぶられるに至ったのである。すなわち、1つはユーラシア大陸の寒冷ステップに由来したトルコ系の遊牧民であり、他の1つは熱帯暑熱砂漠に由来したアラブ系遊牧民である。彼らは地中海沿岸地帯において互いに接触する一方、すでにはるか以前から着実な生活様式を確立していた先住の上記諸民族の上に、重合する結果となった。これら異種のさまざまな民族が、山地に遭遇した際に示した態度、なしとげた可能性そのものが、同時に、それぞれの山地がその後たどるに至った運命の底流ともなったのである。

(1) 先住山地民

ところで、トルコ、アラブ両系の遊牧民が到来する以前に、すでに山地を生活環境としていた先住山地民 *paléomontagnards* には、次のような2種類が識別される。

(a) 内陸縁辺の乾燥山地を占居する半遊牧的農民 この事例は、古代ペルシアの小アジア総督キロス（ダリウスⅡ世の子）が、兄アルタクセルクセスⅡ世の王位を篡奪するためにおこした軍勢に、傭兵として参加したギリシアの歴史家クセノフォンの、「アナバシス *Anabasis*（内陸行）」の記述の中に求められる。彼は、敗走中に通過したクルディスタン・アルメニア地方の、住民の生活にふれているが、それによれば、この地方の住民は、半穴居的・平屋根の住居をいとなみ、牛・豚・羊・ヤギを主要な家畜として所有し、冬はこれらを乾草で養っている。作物の種類は穀物（小麦・大麦）、野菜、ブドウである。

この村の農家は地下構造になっており、その入口は井戸穴のようであるが、下は広く造ってある。そして、駄獣のための出入口はトンネル状に掘り下げたが、農家の住人はハンゴでおりる。家の中にはヤギ・羊・牛・家禽およびそれらの子供が居り、これらは家中で、養われ、餌が与えられている。家中には、大きな壺に収められて、小麦・大麦・豆・大麦酒が置かれている。

[Xenophon : *Anabasis*, IV. v. 25~26]

これらの記述から類推すれば、当時のこの地方の農村景観は、谷底に開かれた灌漑採草地・耕地、およびそれを俯瞰する谷壁・山腹斜面にもうけられた天水穀物耕地、さらに、それより上方の、夏に家畜がともなわれる高山草地、からなる今日のそれと、さして変りがなかったことは明白である。

次に北アフリカに事例を求めれば、リビアのジュベル＝ネフザ山地の中世初期における状況が、果樹作、穴居、さらには家畜の不足飼料を北方のジェファラ *Jefara* 平原で

西南アジア＝北アフリカの山地生活様式（I）

補う目的での半遊牧，を特徴とする住民によって，かなり稠密に居住されていたことが，デスポア Despois によって明らかにされている¹³⁾。さらに彼は，このような形式の生活様式がより広い範囲にわたってみられることにもとづき，マグレブ Maghreb 全域に，その起源が古くかつ固定性の強い，前サハラ農業文化とよぶべき文化型の存在したことを示唆している¹³⁾。その内容は，ジェベル＝ネフザ山地からオーレス Aurès 山地をへて大アトラス山脈に至る，ベルベル族 Berbers の棲息する山地々帯においていとなまれる，谷底の灌漑耕地による階段耕作，冬の逆半遊牧とその不在中の共同穀物貯蔵庫の保有，夏の近距離放牧，という組合せを意味しているのである。

ただ，このような特徴をもった文化型は，マグレブに限られるものではない。すなわちその分布はさらに広く，アルメニア山地，ザグロス山脈からヒンズークシュ山脈に至る，西南アジアの内陸山地にも及ぶものであろう。たとえば，イラン領アゼルバイジャンのサーヘンド Sahend 山においては，エルブルズ山脈の南側斜面に通じてみとめられるところである¹⁴⁾，谷底の灌漑耕地の集約的な利用と，冬の舎飼・夏の高山草地放牧に依拠した家畜飼養とが結合した，マグレブのそれとは類似の生活様式を見出すのである。さらにこのタイプは，アラビア半島のアシール Asir 山地やイエメン Yemen 山地においても，存在するものと想像される¹⁵⁾。

ところで，以上のような形の生活様式に共通してみられる今一つの特徴は，運搬方法にある。すなわち，これら山地民の生活は狭い範囲の移動で完結するものであるため，その点遊牧民的であるよりも農耕民的性格が強いのであるが，ラクダはもとより馬すら必要としないのである。彼らの運搬獣は農耕社会におけるのと同様に牛であり，その事例は中アトラス Moyen-Atlas 山脈や，ジェベル＝アムール Djebel Amour 山地¹⁶⁾，あるいはザグロス山脈中のルーリスタン Luristan 地方に居住するパピ族 Papis¹⁷⁾，ヒンズークシュ山脈南東部のズルグバ族 Zurchbas などについて報告されている¹⁸⁾。しかもこのような例は，中世に馬・ラクダをともなった遊牧民の滲透がこの地方に及ぶ以前においては，おそらくは今日以上に分布していたものであろう。たとえばマルコ＝ポーロは，ケルマン Kerman とオルムズ Ormuz との中間，すなわちザグロス山脈中のある地方における，大きな白牛の駄獣としての美事さに，賛辭を述べている。

カマデの都について ……（そして）（この国の）獸類もまた（他の国のものとは）異なる。そして先づ牛について語らう。（何となれば）牛は非常に大きくそして雪のやうに全く白い。毛は短くそしてなめらかである。そしてこれは暑い所から来たからである。角は短く厚くそして鋭くない。両肩の間に（見たところ駱駝のやうな）全く二パームの高さの円い瘤肉がある。（そし

てそれは（実に）世の中での最も美しいものである。そして人がこの牛に荷を載せようとする時にはそれは（膝を折り）（そして）恰も駱駝がするように（地上に）うづくまる。そして荷を載せ終ると（脚を立てて）起き上がりそして（非常に大きい）荷をよく運ぶ、何となればそれは驚くほど強いのであるから。……〔岩村忍：マルコポーロの研究 上 昭 23 p.123〕

また、それより後の時代にあっても旅行記の類には、たとえば17世紀のシャルダン Chardin は、当時のイランの山間部において、蹄鉄までが打たれた牛が重要な運搬獣であることを述べ¹⁹⁾、また19世紀の考古学者フーシェ Foucher は、インド＝アフガニスタン国境山地において、疲弊した一匹の馱馬の代りに馱獣として牛を傭い上げたことを書きとどめている²⁰⁾。

ただ、牛の飼養がゆるぎされないような、自然条件のすぐれない山地においては、運搬獣としては牛に代って一般にロバが採用されている。たとえば、イラン学者のゲルシェヴィッチ Gershevitch は、西バルチスタン Baluchistan のバシユカルド族 Bashkards について、彼らは移動半径の短い半遊牧をいとなみ、灌漑ナツメヤシ畑と階段耕地によって農耕にも従事し、穴倉状の共同穀物庫をもち、ロバを馱獣として用いていることを記している²¹⁾。このロバについては、ストラボやトレミーの地理書に、つとにその優秀性が述べられたところである。次にストラボを引用しよう。

（カルマニア Carmania＝ケルマン Kerman では）ロバが、馬が数少いのでその代りとして、戦闘に際しても一般に用いられている。彼ら（カルマニア人）は、戦争好きであるため、マルス神 Mars だけを尊崇しているが、ロバをその犠牲とするのである。

〔Strabo : Geography, XV. c III. § 14〕

ゲルシェヴィッチの報告する今日の事情はその当時と、全く変化がないものと推測される。

以上要約すれば、西南アジア＝北アフリカの内陸山地に古くからいとなまれてきた山地生活に、共通にみられる基底的内容は、谷底の階段状耕地での樹木作物をもふくめた灌漑農耕、高位面での天水農耕、およびラクダをとまなうことのない近距離の移動牧畜である。その他の内容については地域的偏差がみられ、まず、共同の穀物庫を保有する特徴は、緯度的位置からしては南寄りの、逆半遊牧的生活がいとまれる山地生活にとまなわれている。この傾向が卓越するのは、冬の遊牧先として温暖なスース Sous 川流域平野、オーレス山地南麓平原をひかえた北アフリカの前サハラ地帯の諸山地、あるいは同じくマクラン Makran の温暖な平地に接したバルチスタンの山地である。他方、穴倉状の家畜小舎、大家族向の共同家屋は、冬の舎飼を必要とする、アルメニア＝クル

西南アジア＝北アフリカの山地生活様式（I）

ド地帯の山地など、逆に北寄りの内陸山地を特徴づける内容であり、家畜の移動放牧も一般に、ごく近くの高処における、夏の放牧に限られている。

以上のような半遊牧的牧畜農耕民は、西南アジア＝北アフリカの、ステップ・砂漠に直接接して横たわる内陸山地に、依拠して生活する山地民であるが、これらの山地ではその平均降水量は僅かに 400～600 mm であり、中にはたとえばジェベル＝ネフザ山地のように、これをはるかに下廻る例も存在する。それ故、とぼしい降水のみに依存する天水農業は不安定であるところから、より確実な農業的基盤の必要性が、谷底の灌漑階段耕地としてあらわれているのである。また、同じくその降水の条件から、これら乾燥内陸山地の原景観は柏・松・ねず等からなる疎林であった。しかしその極相はあまり安定したものではなく、それ故、時には早々に破壊され、今日においてもほとんど回復されるに至っていないのである。かくして、森林的障壁が著大でなかった事実が、早期に住民の居住を許し、歴史の初期において彼らが登場する原因となったとみられる。アラブのマグレブ侵寇に際してベルベル族の抵抗が盛んであったのは、今日ベルベル族の人口重心となっているカビリー山地ではなく、女王カヘナ Kahena の英雄的行為のみられたオーレス山地のような、前サハラ乾燥内陸山地であった。あるいはイランにおいて、アケメネス王朝が古代ペルシアの統一をなしとげるにあたっての政治的核心は、森林ステップの景観をもつザグロス山脈中の、ファールス盆地にあったのである。

(b) 海岸山地を占居する少数森林民 以上のような内陸山地と正に対照的位置にあったのが、これらと背面を接していた海岸山地である。すなわち、歴史の初期から今日の住民とほとんど変りのない住民によって、かなりの密度のもとに占居されていた乾燥内陸山地とは対照的に、森林が繁茂し、湿潤気候を有していた海岸山地は、農村文化に避難的空間を提供することによってそこに人口の密集を促すだけの役割は、果たしていないのである。エルブルズ、ポントゥス、レバノンの諸山脈やジェベル＝アンサリエ Djebel Ansarieh 山地、あるいはトロス山脈中・西部、カビリー山地についての、古代の人口分布に関する資料によれば、中世の遊牧民の侵入がもたらした人口分布変動の渦にまきこまれるまでは、これらの山地はほとんど無住の状態に近かったことが物語られている。たとえばレバノン山脈についてみれば、ローマ時代においてレバノン山脈は、ほとんど空隙のない程の、レバノン杉の大森林を養っていた²²⁾。しかしその後、用材伐採が強度に進められた結果、イスラム支配後 1 世紀においては、木材資源は寥々たる状態となっており、エジプト向けの用材積出しの中心も、レバノン山脈の北に接するカシウス Cassius、アマヌス Amanus 山地、あるいはトロス山脈へと移動している。

しかるにレバノン山脈は、その後もダマスカスなどへの薪炭・タールなどの供給地としての地位にとどまっている。この事實は、二次的森林となったため森林が矮小化しながらも、レバノン山脈が依然として濃密な植物被覆におおわれていたことを物語っている²³⁾。

あるいは別の例をあげれば、アナトリア南部において、リキア・ピンディア *Pisidia* の高地およびパンフィリア平原や海岸地帯が、稠密な人口分布を示していたのに対して、トロス山脈の森林繁茂する山塊は、ほとんど無住のままに取残されており、古代の住居址もごく稀にしか見出されないのである²⁴⁾。また、古代ペルシアの伝説を集大成した内容をもつイランの叙事詩シャー・エナメ *Shah Nameh* においては、エルブルズ山脈北斜面の森林=沼沢の地マザンデラン *Mazanderan*・ギラン *Gilan* 地方は、未開地であるところからあまりその名が出ず、とくにギラン地方は悪魔と妖精の住む土地として語られている。まさにこれらの地方は、エルブルズ山脈の内陸縁辺でその北限を限られた古代ペルシアの活動舞台の、その外廓にすぎなかったのである。

ついで古代の北アフリカに関していえば、カビール族 *Kabyles* の住地すなわち両カビリー山地は、歴史に登場するところがない。大カビリー山地についても、古代ローマの遺跡は、地中海沿岸の若干の港付近や、山地北部を横断するセバウ *Sebaou* 川以北の地、あるいはブージー *Bougie*—デリス *Dellys* 間のローマ道路ぞいの地を除いては、ごく稀な存在にすぎない。しかもそれは主として城壁のような軍事施設の遺跡に限られており、セバウ河谷や山地南縁をふちどるスマム *Soummam* 河谷にあって、大カビリー山地の主嶺ジュルジュラ *Djurdjura* 山地を監視する役割を果しているのである。その意味するところは、当時このジュルジュラ山地が、小カビリー山地中のバポール *Babor* 山地と同様に、文化・組織ともに未成熟な、幾つかの小部族の錯綜地であったためである²⁵⁾。その後、10~11世紀に、ベルベル族のサンハジャ *Sanhadja* 族が樹立したジリド *Ziride* 朝の背景を考察しても、後にブージーおよび地中海沿岸に後退する以前のその初期の首都は、テル *Tell* 地方よりも内陸にあたるティテリ *Titteri* 山地、ホドゥナ *Hodna* 山地におかれている²⁶⁾。またその領域も、大カビリー山地の南をめぐる、セティフ *Sétif*—オーマル *Aumale*—メデア *Médéa* を結ぶ道路ぞいの、すでにローマ時代に盛んに居住・植民が進められた地域を、依然として中核としているのである。両カビリー山地、とりわけ大カビリー山地は、当時においても豊かな森林を蔵し、その伐採された木材がブージー、デリスを經由して、チュニスさらには遠くエジプトにまで積出されていたとあらわれる²⁷⁾。ただ、これらの海岸山地は全くの無住状態であっ

西南アジア - 北アフリカの山地生活様式 (I)

たわけではない。山地の林隙地に分散して、半ば野蛮な住民が認められたのである。6世紀中期のヴァンダル戦役に従軍したプロコピオスも、当時の山地の住民の模様を見事に描写している。

……彼（ユスティニアウス皇帝の将軍ベリサリウス Belisarius）は、（ヴァンダル王）ゲリメール Gelimer がパプア Papua 山地に進入し、最早ローマの軍勢によって捕えることができないことを知った。さて、この山地は、ヌミディア Numidia の涯に所在し、非常に峻しく、どの方向にも高い断崖がめぐらされているため、登攀するには大変な困苦を要する。そして、その山地には、野蛮なムーア人が蟠踞しており、彼らはゲリメールと友好関係にあり同盟している。……

[Procopius : History of the Wars, IV. iv. 26~27]

……ムーア人は、冬も夏も、そしてその他の時期も、換気の悪い小屋で生活している。雪や太陽熱や、その他自然のもたらすどのような不快さにあっても、彼らはそこを離れない。そして、彼らは床に^{ゆか}じかに寝る。うち豊かなものだけが、身体の下に羊毛を延べる。その上、彼らの間では、季節に応じて衣服をとりかえる風習はなく、年中、分厚い外套と粗末なシャツを着ている。そして、彼らはパン・ぶどう酒、その他よい品は持って居らず、小麦または大麦といった穀物を、煮もせず、粉に挽きもせずして食べる。その食べ方は、動物のそれと、ちっともかわるところがない。……

[Procopius : ibid. IV. vi. 10~13]

これらの住民は国家を組織せず、アラビアの著者たちが彼らをカビール Kabyles(部族)と呼んだように、まさに部族制段階にあった。彼らの出自も疑問の多いところである。19世紀中葉に、小カピリー山地において蒐集された資料をもとに明らかとなる、山地生活の模様が、過去のそれと大差がないものとして、プロコピオスの記述に援用すれば、これら山地民の最も確実な生活の資は、森林内の焼畑と小規模な放牧地に依存した移動農牧と、木材の伐採加工に求められていた²⁸⁾。

以上要するに、海岸山地には、自然環境との間に調和を保つかのような生活に甘んじ、森林を征服しつくす能力を持たなかった森林開拓民たちの、貧しい小村が認められるにすぎなかったのである。かくして、地中海沿岸の海岸山地のうち、年降水量が 800 mm を越える条件下にあった山地では、その天然林は中世に至るまで、殆んどその原型をとどめていたものであろうと推察される。

(2) トルコ系遊牧民とアラブ系遊牧民

ついでこの2系統の遊牧民が、今日のこの地方の山地生活様式の配置に、大きな影響をもたらしたのである。ただこの2系統の遊牧集団は、山地に遭遇した際に相異った反応を示している。それは彼ら自身の判断に基づいたものであると同時に、彼らが依存す

る運搬獣の生態的必要に基づくものであった。すなわち、中央アジアの寒冷ステップもしくは大陸性山地を故地とするトルコ系遊牧民は、双峰のバクトリア種ラクダを飼養するが、これに反して、アラビアの暑熱砂漠を故地とするアラブ系遊牧民は、単峰のアラブ種ラクダにたよっている。前者は長毛でおおわれ耐寒力には秀れるが、暑さ特に湿潤な暑さには適応能力がなく、またその素質は山地に適し、小石交りの土地、急斜面の土地などにも馴化するのである。他方アラブ種ラクダは、アシール、ハドラマウト Hadhramaut の山地にはやや異種のを認めるが²⁹⁾、一般に山地には不向きであり、また耐寒性にとほしい。たとえばアラビア半島北部においてすら、遊牧民は冬の夜には、ラクダをテントの風下へと誘導し、その首だけでもテントに入れて休ませるという習慣が認められるのである³⁰⁾。

ともなうラクダの素質の相違は、この2系統の遊牧民の分布条件に決定的な役割を果たしたものとえよう。すなわちアラブ種ラクダは、アナトリアやイランの冬の厳しい気候条件には、到底適応することができなかつたのである。この点に、アラブ系民族の分布が山地に直面して停止している基底的理由の一つがひそんでいる。山地に対して一時的な掠奪は可能であっても、アラブ系遊牧民は決して山地に定着するには至っていない。それ故に、たとえば、イラン南部のペルシア湾岸に分布するアラブ系遊牧民ハムセー族 Khamsehs についてみれば、彼らの住地はファールス地方最南の諸盆地に制約されている。あるいは単峰ラクダは、冬温暖なソ連領トルキスタンにおいても若干その存在を認めるが、しかしイラン国内で隊商にとまわれた場合は、その旅程はイスファハンから北へは及ぶことはないのである。

これとは逆にセルジューク=トルコ族は、ケルマン地方などの南イランの砂漠地帯にあっては、その夏の暑さに耐える能力を欠いていた。イランあるいは小アジアへの滲透に際し、トルコ族は、冬営地を海岸低地に営むには至っていないのである。初期の定着に際しての単元であった大部族のオグーズ Oghuz に由来する地名の、小アジアにおける分布を検討しても、ポントゥス山脈の内陸側縁辺の山麓の幅広い地帯に、最高の分布密度が認められる。すなわちトルコ系遊牧民は、夏は付近の高山草地に赴きながらも、このような内陸の山麓帯を越冬地点としていたのである。この移動形式にかわって、一方では高原上の小山塊に存在する夏の放牧地と、他方では、エーゲ海・地中海沿岸の海岸平野ないしはシリア砂漠に存在する冬の遊牧地とを結合させた、いわゆるアナトリア型遊牧が成立するに至るのは、後の時代であった³¹⁾。しかもそのためには、ラクダの品種改良が前提となっている。すなわち今日アナトリアでみられるラクダは、バクトリア種の牡

西南アジア＝北アフリカの山地生活様式（I）

とアラブ種の牝との交配種であり、繁殖力はあるが退化が著しいため、時に応じてそれぞれペルシア・メソポタミアから輸入されたバクトリア種ないしアラブ種ラクダの新鮮な血が、再投入されているのである³²⁾。ちなみにこの交配種は、10世紀頃³³⁾、トルコ系遊牧民によって、トルキスタンあるいは北部イランにおいて創意されはじめたものと推測される。

以上のような、トルコ・アラブ両系統の遊牧民の対照的な性格は、両者の空間的分布領域を解釈する上で極めて有効であるが、加えて局地的な分布関係を解く鍵としても重要である。すなわち、イラン・アナトリア内陸におけるトルコ系遊牧民は、早々に、高山地帯に夏の放牧地を求める努力をはらってきている。トルコ語の *yayla*（夏の滞在地）という言葉には、涼しさ、冷やかな流水、豊かな草地などの概念が融合し、楽園を連想させるようなイメージがともなわれているのである。今日においても、地中海沿岸低地のアンタルヤ *Antalya*、アダナ *Adana*、あるいは黒海沿岸のトラブゾン *Trabzon*、オールドゥ、ギレスン地方の半定着民までが、夏にその家畜を山地へとともなっているのは、このことに基づいている。トルコ系住民にとって、中央アジア以来親近であった自然は、西南アジアにおいては山地に見出されたのである。これに反してアラブ系遊牧民は、山地に対しては無関心であった。山地に遭遇した場合、彼らはそれを避けるのが通例であり、それ故に、アラブ民族による山地のイスラム化は、ごく皮相な段階にとどまっている。したがって、高地および寒冷ステップを好むトルコ系遊牧民と、平地および暑熱砂漠を好むアラブ系遊牧民とが、一つの山地に共棲するに際しては、明瞭な高度帯別の住みわけが確立されている。たとえば、ザグロス山脈中央部のファールス地方を例にとれば、カシュカイ族 *Qashqais* を代表とするトルコ系遊牧民は山地の高処を、アラブ系遊牧民は同じく低処をそれぞれ占居し、加えてその中間高度帯にペルシア系住民が介在するという分布現象が認められるのである。また、これら別系の遊牧民が、山地のある一カ所の遊牧地を、季節に応じて順次利用するにあたっての慣例をみれば、初夏から盛夏にむかうにつれ、まずトルコ系がこの放牧地を用いて高山草地へ去った後をペルシア系が利用し、さらに同じくペルシア系が去った後に、アラブ系がこれを継ぐのである³⁴⁾。要するに、一方の遊牧民にとって友誼的・親近的な存在である山地は、他方の遊牧民にとっては、全く敵対的・排斥的な存在となっている。

（筆者は関西大学助教授）

原 註

- 1) J. Despois (1960) : La répartition de la population en Algérie, *Annales ; Economies, Sociétés, Civilisations*, pp.915~926
- 2) E. de Vauma (1953) : La répartition de la population au Liban, *Bulletin de la Société de Géographie d'Egypte*, pp.5~75
- 3) E. de Vauma (1960) : Le Djebel Ansarieh, étude de géographie humaine, *Revue de Géographie Alpine*, pp.267~312
- 4) J. Dresch (1941) : Documents sur les genres de vie de montagne dans le Massif Central du Grand Atlas, Tours
- 5) J. Despois (1935) : Le Djebel Nefousa, Paris
- 6) A. Tanoglu (1959) : Die Verteilung der Bevölkerung in der Türkei, *Review of the Geographical Institute of the University of Istanbul*, n°5, pp.94~106
- 7) X. de Planhol (1959) : Etudes sur la vie de montagne dans le Sud-Ouest de l'Anatolie, *Revue de Géographie Alpine*, pp.375~390
- 8) X. de Planhol (1954) : La vie de montagne dans le Sandras dag, *Revue de Géographie Alpine*, pp.665~674
- 9) E. de Vauma (1953) : ibid.
- 10) G.Bartsch (1934~35) : Das Gebiet des Erciyes dagi und die Stadt Kayseri in Mittel-Anatolien, *Jahrbuch der Geographische Gesellschaft Hannover*.
- 11) W.D. Hutteroth (1959) : Bergnomaden und Yaylabauern im mittleren Kurdischen Taurus, Marburg.
- 12) J. Despois (1935) : ibid.
- 13) J. Despois (1953) : Les greniers fortifiers de l'Afrique du Nord, *Cahiers de Tunisie*, pp.38~60
 J. Despois (1956) : La culture en terrasses en Afrique du Nord, *Annales ; Economies, Sociétés, Civilisations*, pp.42~50
- 14) X. de Planhol (1958) : De la plaine pamphylienne aux lacs pisidiens, nomadisme et vie paysanne, Paris
 X. de Planhol (1959) : Observations sur la géographie humaine de l'Iran septentrional, *Bulletin de l'Association de Géographes Français*, n° 284—5, pp.57~64
- 15) St. J. B. Philby (1952) : Arabian Highlands, New York
- 16) J. Despois (1957) : Le Djebel Amour, Paris
- 17) C. J. Feilberg (1952) : Les Papis, Copenhagen

西南アジア = 北アフリカの山地生活様式 (I)

- 18) K. Ferdinand (1959) : Les nomades, (J. Humlum : La géographie de l'Afghanistan, Copenhague)
- 19) Lecointe edit. (1830) : Nouvelle bibliothèque des voyages, Paris, t. VI, p. 186
- 20) A. Foucher (1901) : Sur la frontière indo-afghane, Paris, p. 16
- 21) I. Gershevitch (1959) : Travels in Bashkardia, *Royal Central Asian Journal*, pp. 213~225
- 22) E. de Vaumas (1953) : *ibid.*
E. de Vaumas (1954) : Le Liban, étude de géographie physique, Paris
- 23) M. Lombard (1959) : Le bois dans la Méditerranée musulmane (VII^e—X^e siècles), *Annales ; Economies, Sociétés, Civilisations*, pp. 234~254
- 24) X. de Planhol (1954) : *ibid.*
X. de Planhol (1958) : *ibid.*
- 25) C. Courtois (1955) : Les Vandales et l'Afrique, Paris, p. 115, pp. 119~120
- 26) L. Golvin (1957) : Le Maghreb central à l'époque des Zirides, Paris
- 27) M. Lombard (1959) : *ibid.*
- 28) A. Nouschi (1959) : Notes sur la vie traditionnelle des populations forestières algériennes, *Annales de Géographie*, pp. 523~535
- 29) H. von Wissmann (1959) : Le nomadisme bédouin en Arabie, *Encyclopédie de l'Islam* (2^e édit.)
- 30) H. R. P. Dickson (1949) : The Arab of the Desert, London, p. 414
- 31) X. de Planhol (1959) : Geography, Politics and Nomadism in Anatolia, *International Social Science Journal*, pp. 525~531
- 32) V. Lennep (1870) : Travels in Little Known Parts of Asia Minor, London, t. II, pp. 162~164
- 33) Al Masudi (1864) : Les prairies d'or, Paris, t. III, p. 4
- 34) F. Barth (1959) : The Land Use Pattern of Migratory Tribes of South Persia, *Norsk Geografisk Tidsskrift*, pp. 1~12